



TITLE:

日蘭會商の諸問題

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 日蘭會商の諸問題. 經濟論叢 1934, 38(5): 971-995

ISSUE DATE:

1934-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130447>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第三十八卷 第五號

昭和九年五月一日發行

論 叢

相續税と登録税との交錯……………法學博士 神戸正雄

節約の矛盾について……………文學博士 高田保馬

人口稠密の原因觀……………法學博士 財部靜治

時 論

日蘭會商の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

北海道釀定置漁業に於ける漁場動員……………經濟學士 岡本清造

相續税の本質……………經濟學士 三谷道麿

リカルドオの比較生産費說について……………經濟學士 朴 克 采

景氣觀測について……………經濟學士 祭原光太郎

說 苑

擴張再生産式について……………經濟學士 柴 田 敬

肥前有田陶業の發達……………經濟學士 江頭恒治

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

日蘭會商の諸問題

谷 口 吉 彦

目次

一、日蘭貿易の發展
四、バーター制の促進策

二、日蘭貿易の分析
五、バーター制の代替策

三、バーター制の可能性
六、日蘭會商の特異性

一、日蘭貿易の發展

近く開かるべき日蘭會商に對しては、わが國民はそれらの利害關係の立場より、また吾が國民經濟の全體的立場より、種々の主張をなした要求を提出するであらう。かくして吾が國民の興味と輿論を喚起する點においては、先きの日印協定または日英會商と同じく、また來らんとする日濠會商にも劣らず、國民を刺激するであらう。それだけこの會商は吾が國民の全般にとつて重要性を有するものであるが、併しわれわれは茲で單なる希望や主張を開陳する代りに、先づこの會商の根柢に横たはる事實について、正確なる認識を有たねばならぬ。即ち日蘭間の經濟關係は主として貿易關係に限らるゝが、その日蘭貿易は先づ如何なる發展過程を経て今日の狀態に到達したか、今日の狀態は如何なる意味をもつてゐるか、その將來の發展に對して如何なる考察を

下しうるか等々について、われ／＼は先づ現實の事實に立脚せねばならぬ。この小論は決して日蘭問題の解決そのものを志すものではない。たゞその解決に對して、多少の參考ともなりうる資料を提供しうれば足りるものである。

いま蘭領印度および和蘭本國に對する吾國からの輸出および輸入につき、明治三十一年（一八九八）より昭和八年（一九三三）に至る三十六年間の數字を示せば、左表の如き發展を示してゐる。

第一表 日蘭貿易の發展

		蘭領印度		和蘭本國	
		輸 出	輸 入	輸 出	輸 入
		千円	千円	千円	千円
明治	31	37	1 160	373	249
	32	46	1 306	322	914
	33	362	7 412	119	810
	34	383	7 304	344	408
	35	572	6 592	745	773
	36	912	10 843	224	815
	37	1 082	17 912	433	500
	38	1 233	14 830	162	874
	39	1 394	23 520	226	1 233
	40	2 261	22 039	267	1 204
	41	2 124	23 965	431	1 020
	42	3 072	18 632	665	840
	43	3 134	18 880	726	919
	44	3 724	15 459	427	1 183
	45	4 343	19 063	468	1 157
大正	2	5 419	37 389	669	810
	3	5 479	22 025	531	621
	4	8 438	16 312	42	278
	5	17 419	14 228	113	422
	6	36 245	17 333	105	1 261
	7	71 677	48 837	—	1 746
	8	57 355	65 528	1 479	3 167
	9	107 225	68 629	7 900	6 281
	10	54 211	70 427	929	3 446
	11	47 401	71 758	1 683	3 152
	12	40 591	72 955	1 774	4 103
	13	59 331	92 401	2 899	7 911
	14	85 557	103 373	2 617	5 166
	15	74 754	103 077	2 496	4 726
昭和	2	82 581	103 775	3 387	3 981
	3	73 414	112 917	6 914	4 772
	4	87 125	77 345	6 917	5 462
	5	66 047	59 983	8 172	2 988
	6	63 450	46 080	10 136	2 884
	7	100 254	40 409	12 444	3 879
	8	157 487	55 709	12 325	3 717
總計		1326	139 1509	89 464	83 616
最近十年計		850 000	795 069	68 307	45 436

この表によつてわれ／＼は先づ日蘭貿易ことに蘭領印度に對する吾國の貿易が、著しき量的發展をなしてゐることを知るが、それはこゝでは重要な問題でない。問題は寧ろその質的發展に

ある。

そも／＼最近の日蘭問題の起つた根本の事實は、わが商品の蘭領印度への急激な進出によると言はれる。これは前表の最後に現はれるが如く事實ではある。即ち昨年度の蘭印輸出一億五千七百萬圓に對し、輸入はおよそ三分の一の五千五百萬圓に過ぎず、蘭印にとつては一億圓以上の入超を示してゐるからである。

併しながら蘭印に對するかゝる輸出超過は、漸く最近數年間に現はれた現象に過ぎず、その恒常的狀態は寧ろ反對に、吾國の入超を示してゐる。即ち前表によりて明らかなる如く、わが國の出超は最近の五ヶ年と、過去の偶然的なる四ヶ年に過ぎず、明治三十一年より昨年に至る三十六年のうち、わが出超は僅かに九ヶ年に過ぎず、他の二十七ヶ年は總て吾國の入超を示してゐる。即ち吾國は蘭印に對して、有力な市場を提供しつゝその發展に寄與したと言へる。

之を貿易價額について見るもまた、昨年の吾が輸出は一億五千萬圓を超えて、驚異的の進出をなしたと言はるゝが、六年前の昭和三年には、吾國は却つて一億一千二百萬圓の輸入をなしてゐる。最近十年間の合計においては、吾が輸出八億五千萬圓に對し、輸入はほゞ八億圓に近く、十年間の出超は僅かに五千萬圓に過ぎずして、ほゞ均衡に近いと言はれる。更に過去三十六ヶ年の通計においては、吾が輸出十三億圓に對し、輸入十五億圓を超えて、その差額約二億圓は、吾が國の入超となつてゐる。

和蘭本國との貿易は、その絶對額において、蘭印の十分の一にも足らぬものではあるが、その發展の傾向は、甚だしく前者に似てゐる。即ち之に對する吾國の出超は、漸く最近數年に特異な現象であつて、それ以前には數十年にわたつて連續的に吾國の入超を示してゐる。従つて最近十年間の合計では、吾が輸出六千八百萬圓に對して輸入四千五百萬圓、明治三十一年以來の過去三十六ヶ年では、通計八千九百萬圓の輸出に對して、八千三百萬圓の輸入となり、ほゞ輸出入均衡の状態にある。

以上の觀察によつて吾々の知り得たる所は、日蘭間の貿易關係はその恒常的性質においては、吾國の入超と彼方の出超を來すものである。たゞ最近數年の例外的現象は、反對に吾國の出超と彼方の入超を示しつゝあるが、これは蘭領印度の經濟的地位の一般的變化に伴ふ必然の結果であつて、必ずしも特に吾國が進出したゝめのみではない。このことは前表によつても明らかであつて、吾國の輸出は昨年の例外的現象——これに近い例外的現象は大正九年にも發見せられ、その時は輸出一億七百萬圓を超えてゐる——を除けば、大體は七、八千萬圓程度に過ぎず、それはほゞ最近十年來の現象である。それにも拘らず、最近數年來の出超が現はれたのは何故かと言ふにそれは即ち著しい輸入の減退、即ち蘭印側より言へば輸出減退の現はれたためである。

このことは蘭印政府の發表した對日貿易の數字によつても、明らかに證明しうる所である。之によれば最近五年間の蘭印より日本への輸出入は、次の如く示されてゐるといふ。（大阪朝日新聞、

昭和九年四月十六日所載)

日本への輸出

日本より輸入

一九二八年	五七、一七八千盾	九二、六八二千盾
一九二九年	四九、九七三	一一四、八三五
一九三〇年	四六、二三三	一〇〇、一二五
一九三一年	三三、〇五一	九二、五五一
一九三二年	二三、六五七	七八、三三九

これは前掲の吾が貿易表と表裏の關係にあり、而も増減の狀態は兩者必ずしも一致を示してゐるものではないが、假りに之によつて見るも、日本への輸出は著しく遞減せるに對し、日本よりの輸入もまた遞減してゐることが判る。即ち日本の進出は右の表では全く現はれて居らず、絶對的には進出どころか、却つて減退してゐることが明示されてゐる。それにも拘らず問題のおこるのは、全く日本への輸出即ち蘭印からの吾が輸入が、著しく減退したがために外ならぬ。

然らばこの蘭印の輸出減退ことに吾國への輸出減退は、果して如何なる理由によるものか、之を確かめるためには、更に貿易品の内容に立ち入つて、之を分析する必要を感じるが、それは姑らく次節の問題として、こゝでは一般的に、殊に最近に至つて蘭印輸出の減退した理由として、特に注意を要する問題は、その爲替關係即ち根本的には、フランスを中心とする金本位ブロック

の問題に歸着する様に思はれる。

金本位ブロックと日蘭會商とは、それ故に最も重要な問題を構成する。今日のところ金本位ブロックの將來については、何人も適確な見透しをなし得ないであらう。況んや將來に向つてその持續性を保證し得るものは、恐らく無いであらう。今もし金本位ブロックが崩壊して、蘭印爲替が各國なみに下落したとすれば、蘭印への吾が輸出は確實にその出鼻を挫かれねばならず、反對に蘭印からの吾が輸入は激増して、こゝに日蘭貿易はその本來の性質に立ち返つて、恐らく吾國の入超と彼方の出超とを結果するかも知れぬ。これわれゝが最初に、最近の日蘭貿易ことに昨年の吾が出超の如きは、明らかなる一の例外的現象に過ぎぬと言つた所以である。

蘭印政府は統計的數字を示して、蘭印における吾國と和蘭本國との地位が顛倒しつゝあることを證明するが、これまた一般的には主として右の金本位ブロックより來る結果であつて、従つて一朝にして金本位ブロックの崩壊した曉には、この現象もまた全く一時的の例外的現象に過ぎなかつたことを知るであらう。

それ故に日蘭會商における最も根本的な重要問題は、金本位ブロックの將來である。この將來に對する保證の得られざる以上は、一時的な例外的現象を基礎として、それに基づく協定を作ることは危険と言はねばならぬ。これ吾々が日蘭貿易の從來の發展を觀察して導き出された結論である。

二、日蘭貿易の分析

蘭領印度への日本商品の進出は、昨年の例外的現象を除けば、絶對的には意外にも減退の傾向にあること、それにも拘らず蘭領印度にとつて問題の起るのは、寧ろ蘭領から吾國への輸出の減退にあること、従つて日蘭問題の根本的根據は、日本の進出によるといふよりは、寧ろ蘭印の退却に由來すること、従つてそれは一般的には蘭印側の經濟的事情なканづく最近では金本位ブツクの爲替高に原因するところ少なからざることは、昨年の例外的進出より見るもほゞ推論せられる所であるが、かくの如き一般的事情の外に、主要貿易品のそれ々の特殊事情によることもまた考へられる。この點を吟味するためには、われ／＼は更に進んで日蘭貿易の内容に立入つて之を分析することを要する。

先づ第一に、蘭印よりの吾が輸入は、全體として最近十年來、著しく減退傾向を示してゐるがその内容は如何なる理由にもとづくか、いま大正十三年以來の十年間における主要な輸入品價額を示せば左表の如くなる。

第二表 蘭領印度よりの主要輸入品

	輸入總額	採油用原料	砂糖	礦油	生ゴム	錫	木材	合計	輸入總額に對する%
大正13	92 401	78	59 500	15 133	1 466	2 015	867	79 059	85.1
14	103 373	0	69 754	15 436	376	1 890	650	88 106	85.2
15	103 077	4	69 316	14 025	214	1 638	981	86 178	83.6

2	103 775	559	63 307	16 755	594	768	744	82 727	79.7
3	112 917	265	63 702	19 621	1 220	260	859	85 927	76.1
4	77 345	817	30 354	17 955	1 880	647	1 151	52 804	68.3
5	59 983	937	25 932	13 374	2 173	141	601	43 158	72.0
6	46 080	1 405	15 587	13 235	3 206	392	760	34 605	75.1
7	40 409	2 326	3 133	14 864	4 905	287	631	26 286	65.0
8	55 709	2 249	12 786	15 830	7 268	1 705	1 609	41 447	74.4

之によりて先づ注意すべき事實は、第一に蘭印よりの輸入品は、極めて少數の主要品に限られ謂はゞ集中性が極めて強い。即ち前表の最後に示さるゝが如く、主要商品六種をもつて、多き時は全輸入の八割五分を超え、少き時も六割五分を下らない。これは後に述ぶる所の輸出品の多様なるに比較して、極めて顯著な事實であるが、かくの如き集中性の強いことは、貿易上の危険を冒すこと大なるものと言はねばならぬ。謂はゆる貿易路の急激なる變化のおこる時は、一朝にして貿易の激變をうけねばならぬからである。

まづ輸入總額について見る時は、十年前の一億圓は最近に至つて半減してゐる。ことに昭和三年には最高一億一千二百萬圓にも達してゐるが、この程度の輸入が持續されたとすれば、昨年の異常な例外的輸出でさへ、著しき不均衡とはならなかつたであらう。そこで問題は、その當時の輸入の内容にあるが、前表によりて明らかなる如く、それは主として砂糖の輸入如何によつて左右されてゐる。即ちその當時は砂糖のみにて年々約六、七千萬圓の輸入があり、これが全輸入の

六、七割を占めてゐたのであるが、最近ではこれが急激に減少して、昭和七年の如きは僅かに三百萬圓に落ちてゐる。

その他の輸入品のうちには、例へば採油用原料・生ゴムの如く、この十年間に急激な増加を示してゐるものもあるが、その絶対額の大ならざるために、前述の砂糖の著減によつて打消されてしまつてゐる。けれどもこの種の商品は、將來への發展を約束されてゐるものと言ふことが出来るから、この遞増傾向は日蘭貿易の將來にとつて注意すべきであらう。錫・木材の如きは年によりて甚だしき變動はあるが、一定の傾向は認められない。礦油はこの十年間を通じて殆んど一定し年々およそ千五百萬圓程度を輸入しつゝある。また吾國全體の礦油輸入總額も、この十年間を通じて大差なく、年々およそ三千五百萬圓程度のものであるから（原油・重油を除く）、蘭領印度はその中の四割乃至五割の地位を占めて、殆んど大なる變動を示してゐない。

そこで問題は著しく減退した砂糖と、著しく増加した採油用原料・生ゴムにあるが、これらの減退または増進が如何なる理由によるかを確かめるためには、それらが吾國全體の同種商品の輸入に對して、如何なる地位を占めるかを知らねばならぬ。次の第三表はこの目的をもつて作られたものである。

この表によつて先づ砂糖を見るに、その輸入總額に對する蘭印よりの輸入の割合は、この十年間を通じて大差なく、およそ九〇%以上を占めてゐる。述べ來れる如く砂糖輸入の絶対額は、著

第三表 主要輸入品の地位

	砂 糖			採油用原料			生 ゴ ム		
	輸入總額	蘭印輸入	總額に對する%	輸入總額	蘭印輸入	總額に對する%	輸入總額	蘭印輸入	總額に對する%
大正13	63,850	59,500	93.2	18,099	78	0.4	23,342	1,466	6.3
14	75,088	69,754	92.9	22,804	0	0.0	33,610	376	1.1
15	83,672	69,316	82.8	29,485	4	0.01	40,010	214	0.5
昭和2	75,804	63,307	83.5	18,853	559	3	34,398	594	1.7
3	64,958	63,702	98.1	21,521	265	1.2	27,895	1,220	4.4
4	31,159	30,354	97.4	30,778	817	2.7	33,885	1,880	5.5
5	32,973	25,932	99.8	19,968	937	4.7	17,930	2,173	12.1
6	15,603	15,587	99.9	14,548	1,405	9.7	13,183	3,206	24.3
7	3,332	3,133	94.0	14,772	2,326	15.7	15,988	4,995	31.2
8	12,793	12,786	99.9	23,292	2,249	9.7	29,685	7,268	24.5

しく減退せるに拘らず、蘭印の占むる歩合には大差なく、何れかと言へば遞増傾向さへ現はれてゐるといふことは、砂糖の減退した理由が謂はゆる貿易路の變化によるものではなくして、吾國の全體としての砂糖輸入の減退したるためであること、換言せば吾國の砂糖需要が、次第に自給の状態に進みつつあるがためであることを示すものである。今もし蘭印からの砂糖輸入の減退が他の地方からの輸入のために壓迫されたものならば、右の歩合は絶対額の減退と共に減退する筈である。

次に輸入絶対額の著増してゐる採油用原料および生ゴムに就て見るに、それらの輸入總額に

對する割合は、極めて著しく遞増してゐる。即ち前者は1%足らずから一〇%前後まで、後者は二〇—三〇%の地位まで累増してゐるのを見る。即ちこの兩者の蘭印からの輸入が著増したのは吾國の需要が増加したといふよりは、寧ろ他國からの輸入を犯して、之に取つて代つたからである。即ちこの二つの絶對輸入總額は、昨年 of 例外的増加を除けば、この十年間に却つて漸減傾向にあつたものである。それにも拘らず、蘭印の地位が向上しつゝあるのは、謂はゆる貿易路の變化した結果であると考へざるを得ない。たゞこの二つは絶對額の小なるために、全體としては砂糖の減退によつて打消されてゐる。

吾國から蘭領印度への輸出は、全體としては最近十年來は大體に減退傾向にあり、たゞ昨年と一昨年において例外的に進出したに過ぎないことは、前節において既に明らかにされたる所である。然らばかゝる一般的傾向および最近の例外的進出は如何なる内容において現はれたものか、次に主要輸出品につき最近十年間の數字を示す。

第四表 蘭領印度への主要輸出品

	輸出總額	麥	酒	綿織絲	綿織物	絹織物及人造絹織物	メリヤス品	帽子	紙類	セメント
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
大正13	59351	262	2 533	37 133	1 560	1 233	361	296	490	
14	85556	326	3 189	49 373	2 033	1 739	479	405	1 577	
15	74754	448	2 974	44 520	2 255	1 861	358	200	1 656	

昭和 2	82581	426	1 358	49 213	2 486	2 204	513	85	2 540
3	75414	591	828	39 275	3 392	1 736	701	81	2 367
4	87125	488	770	42 283	6 401	2 699	853	113	3 448
5	66047	350	446	28 284	8 882	1 720	576	149	3 263
6	63450	234	357	28 279	8 910	1 569	372	129	2 198
7	100251	535	1 445	50 228	14 365	2 524	728	643	2 600
8	157487	1 639	1 236	78 273	15 988	4 234	1 230	1 082	1 368
大正13	千円 3 569	千円 938	千円 844	千円 1 037	千円 383	千円 357	千円 266	千円 51 352	千円 85.5
14	5 825	1 758	1 334	3 769	658	827	479	73 771	86.2
15	3 260	1 593	941	1 952	912	507	302	63 739	85.3
昭和 2	4 253	1 826	1 031	1 600	1 230	752	507	70 024	84.8
3	4 822	1 697	1 504	1 581	1 177	901	569	61 222	83.4
4	4 927	1 931	1 735	2 422	1 432	1 106	754	71 362	81.9
5	2 265	1 094	1 023	1 980	920	650	664	52 266	79.1
6	1 711	1 149	841	1 265	1 008	590	593	49 205	77.5
7	2 414	1 070	2 574	1 223	894	766	803	82 812	82.6
8	3 728	2 068	4 365	2 498	1 264	1 706	1 924	122 603	77.8

この表について第一に注意すべきは、わが輸出品の極めて多様にして分散性に富めることである。即ち右の表に掲ぐる諸商品の輸出総額に對して占むる割合は、前表の最後に示すが如く、大體七〇%乃至八〇%であるが、それに包含せらるゝ商品の種類は前表の如く十五商品に達する。

さきの蘭印からの輸入品は、僅かに六商品でほぼ同じ割合を占めたと對比して、著しき相違と言はねばならぬ。たゞ是ら十五商品のうち、その重要な部分は、綿織物に占められ、年々輸出額のおよそ二分の一は之に屬し、この點では輸入の側に之に匹敵するものを見出し得ない。たゞし綿織物として包括せらるゝものの中には、種々雑多のものを包含することと言ふまでもない。

最近の一、二年において著しき例外的進出をなせる商品は、麥酒・絹及人絹織物・帽子・紙類・翫具等であつて、その他に綿絲・綿織物・メリヤス製品・硝子及同製品・鐵製品・ラムプ及同部分品も増進してはゐるが、是等は嘗つての進出を挽回せるものか、または進出の著しからざるものである。之に反して却つて輸出の減退せるものには、セメント・陶磁器・ゴムタイヤ等を擧げることが出来る。更に最近の異常的進出を除外すれば、殆んど總ての商品に互りて、減退傾向を認めることが出来る。即ち最近の進出もつとも著しき前掲の麥酒以下の諸商品でさへ、最近の一、二年を除外すれば、漸落傾向の多い。

要するに蘭印への吾が商品の進出は、たゞ相對的の意味において認められるに過ぎない。こゝに相對的と言ふは、第一に蘭印から吾國への輸入の著減に比較しての意味と、第二に他の諸國とともに和蘭本國から蘭印への輸出の著減に比較しての意味と、二重の意味における比較的進出を言ふものである。

三、バーター制の可能性

かくの如くして日蘭貿易の發展とその内容を検討した結果は、現實の事實に關する多くの認識を得させるわけであるが、併し昨年來の吾が商品の進出は、異例的とは言へ可なりに積極的であり、且つ之に對して極めて排他的なる輸入割當制が、すでに現實の事實として蘭印に實施されんとしてゐる以上は、この壓迫を緩和する何等かの手段を考案することは、來るべき日蘭會商に於ける一つの重要な問題であらう。この手段の一つとしてバーター制の可能性如何が、すでに吾國にも早くより問題とされつゝある。言ふまでもなく今日のバーター制すなはち交換貿易制とは、決して文字通りの物々交換ではなく、たゞ輸出入を國別になるべく均衡させようとするに外ならぬ。そこで問題は如何にして輸出入を均衡に近づけるかにある。

最初に述べたる如く日蘭貿易は、本來は吾國の入超すなはち蘭印の出超を續けたものであるが、たゞ最近の五ヶ年は逆に吾國の出超となり、ことに昨年ははゞ一億圓の大出超を示すことゝなつたから、この吾國からの輸出を基準とすれば、日蘭間のバーター制は、吾が輸入を増加することによつて達成されねばならぬ。即ち吾國からの輸出を減退せしめざる程度に、輸入を増加せしめんと計畫する場合であつて、之を假りに『積極的バーター制』と稱するならば、わが國は先づこの積極的方法につき考慮せねばならぬこと言ふまでもない。

併しながら他方にまた、昨年来の吾が出超は、輸入の減退に負ふよりも寧ろ輸出の増進に負ふところ大なる事實に鑑み、また蘭印の輸入割當制における吾が輸出の壓迫に鑑みて、或る程度に輸出を制限することによつて、均衡に近づけしめんとする『消極的バーター制』も、全く考慮の餘地がないわけではない。固よりこの場合にも、最近數年來の吾が輸入を基準として、その程度に輸出を引下げんとする全く消極的のバーター制ならば、恐らく考慮の餘地は少いであらう。

そこで先づ吾國への輸入を増加せんとする積極的バーター制の可能性を見るに、最初に検討したるが如く、最近までの不均衡は主として輸入減退によるものであり、その内容は主として砂糖輸入の減退によるものである。そこでこの砂糖の輸入を復舊しうるならば、可なりの程度にバーター制を實現しうる得るわけである。これが先づ第一の問題となる。

ところでこの砂糖輸入の減退は、すでに検討せるが如く、貿易路の變化によるものではなくて、吾が國の砂糖の對外需要そのものゝ減退すなはち砂糖自給の實現されつゝあるが爲めである。たゞこの砂糖自給の實現は、砂糖關稅の保護作用に負ふところ大であり、この關稅を撤廢または輕減するにおいては、多少は蘭印からの輸入を増加しうるであらう。それ故に砂糖輸入の増加によるバーター制の可能如何は、一は吾が國內における砂糖資本の犠牲において、砂糖關稅の調節を計るか、一は吾國からの砂糖輸出の増進を計ることによつて、その輸入を増加しうるか、何れかの方法によらねばならぬ。いま最近三ヶ年における砂糖輸出の状態を見れば次の如くである。

第五表 砂輸出先國別表

	昭和六年				昭和七年				昭和八年			
	數量 十萬斤	價額 千円	價額歩合		數量 十萬斤	價額 千円	價額歩合		數量 十萬斤	價額 千円	價額歩合	
滿洲國	八・八	四九一	三三		五四	三三五	四・三		六六	六五三	四・四	
關東州	三七〇	一九五九	三三・二		七九	四四六	五・六		一〇五	六九四	四・〇	
中華民國	一八九五	二九五〇	三七		四六六	二六五	三・一		九〇二	六二六	四・三	
露領亞細亞	共	三八六	二三		一五	一〇三	一・三		八	五九三	四・〇	
其他	二二〇	一一三	七六		五三	元七	三七		六	五〇九	三四	
合 計	二六三	一四三二	一〇〇		一八九	七九七	一〇〇		二七三	一九九	一〇〇	

之によりて明らかなる如く、吾が輸出先の大部分は、關東州および中華民國であり、且つこの兩者は可なり共通の性質を有するから、之を一つとすれば年々およそ九〇%は、この兩地に輸出されてゐる。それ故に砂糖輸出の將來は一に兩地への輸出如何に依存すると言へる。従つて吾國の對支貿易關係が復舊し、且つ支那の購買力が増進するか、或は滿洲國の購買力が増進されざる以上は、砂糖の輸出に大なる期待をかけることは出来ない。且つまた内地の砂糖資本を犠牲にして、關稅を撤廢または低下することは、今日の現實においては殆んど困難であるから、結局するところ砂糖の輸入増加は、たゞ多少の程度に期待しうるに過ぎない。

次に蘭印からの輸入品のうち、最近において著しく遞増傾向を示せるものとして、採油用原料および生ゴムを擧げうることに先きに指摘した所であるが、この輸入増加は、砂糖の場合の如く吾

國の對外需要の變化によるものではなく、寧ろ主として貿易路の變化すなはち他の地方からの輸入の減退によるものである。即ち採油用原料については、主として支那・關東州からの輸入減退により、生ゴムについては、主として海峽植民地からの輸入減退によるものである。そこでいま蘭印からの輸入増加を計るとせば、姑らく國內需要の増加を別にすれば、これらの他の地方からの輸入を抑へねばならぬ。採油用原料における蘭印の地位は、一〇%内外に過ぎないから、こゝに侵出の餘地は大いに残されてゐるわけではあるが、その地方は主として中華民國であり、最近では滿洲國の進出著しきものがあるから、是等の地方からの輸入を抑へる點では、そこに新たな問題の發生しうる可能性があり、かりに之を忍んで大なる程度に侵入し、輸入の五〇%までを獲得したとしても、その絶對額は一千萬圓程度のものに過ぎないから、全體としての不均衡を調節する力は、さほど大なるものではない。たゞ何程かのバーター制への寄與を認められ得るに過ぎない。生ゴムの輸入もまた、その絶對額においては之と大差なく、且つこの輸入増進は主として海峽植民地からの輸入を犠牲として得らるゝものであるから、この地に於ける邦人事業を壓迫することなくしては困難であり、これまた大なる期待をかけることはむづかしい。以上の砂糖・採油用原料・生ゴムの三つを合して、輸入の増進されうる程度は、精々のところ二、三千萬圓であらう。

之に比すれば第三の石油輸入は、その絶對額において大きい。わが國は最近數年來ほど一億圓

づゝの石油を輸入しつゝあり、そのうち蘭印からの輸入はほど千五百萬圓程度に過ぎないから、この割合を増加しうるならば、こゝには可なり進出の餘地は残されてゐる。假りに全輸入の三分の一まで侵入するとせば、およそ二千萬圓近くを増加しうべく、前の砂糖・採油用原料・生ゴムと合して、精々のところ五千萬圓程度の増加ともなれば、恐らく極限のバーター制であらう。然らば輸入の絶對額は一億圓程度に達して、一昨年の輸出とほぼ均衡し、昨年の輸出に比しては五千萬圓の不足となる。たゞ右のうち砂糖と石油とは、蘭印の對内的影響に大なる相違あることを注意せねばならぬ。即ち砂糖輸入の増加は、蘭印の土民階級その他的一般購買力に影響するところ大であるから、民衆相手の吾が輸出品に對するバーター制として極めて適當であるが、石油輸入の増加は、たゞ少數の石油資本ことに主としてイギリス石油資本の利益を齎らすに過ぎないと言はれる。然らば右のバーター制にもまた、それに内在する一つの矛盾を否定し難い様である。

四、バーター制の促進策

日蘭間のバーター制は、以上のぶるが如く大なる期待を之にかけることは困難ではあるが、併し全く不可能といふわけではない。輸入工作よろしきを得れば、或程度の均衡状態に近づくことは可能である。たゞ問題は、このバーター制の可能性を、如何にして實現しうるかの點にある。言ふまでもなく之を自然に放任しては、可能性は遂に可能性に止まつて、恐らく實現性を缺くで

あらう。別言せば何等かの輸入工作を加ふるでなければ、右の程度のバーター制さへ實現は困難であらう。そこでその實現を促進する方策として、われ／＼は如何なる手段を考へ得るか、これが次の問題とならざるを得ない。

言ふまでもなく今日の貿易統制は、資本主義の埒内にあつて營利貿易の上に立つものであるから、いま一定商品の輸入を増加せしめて、バーター制を或る程度に實現せしめんとするに當つては、何らかの方法によつてその商品の輸入を有利ならしめねばならぬ。それ故に問題は、例へば蘭印からの砂糖・石油・生ゴムその他の輸入を促進するために、如何なる方策を採りうるかといふに歸する。

その第一の方法は、例へば砂糖關稅の撤廢または輕減の如きである。之によつて蘭領印度の砂糖が安價に吾が國內市場に齎らさるゝならば、砂糖輸入は増加すると共に、國民の消費生活は利益されるであらう。けれども他方には、それだけ國內糖業を壓迫して、糖業資本の利益は減少する。そこで問題は砂糖産業資本の利益と砂糖商業資本の利益との相剋となる。この相剋が同じ巨大資本の内部關係として現はれるならば、問題は利害の大小によつて決せられるわけであるが、異なる資本の間に起るならば、第三者の介入による何等かの補償制度を必要とする。何れにせよ既にカルテル關稅の域にある吾國の砂糖關稅が、現實において容易に撤廢されうると考ふるが如きは、輕卒なる認識不足と言はねばならぬ。たゞ之に關聯して現實に可能なるは、砂糖に關する

保稅制度の促進であらう。この制度の促進によつて、無税に輸入されたる砂糖が精製せられまたは加工せられて、再輸出を増進しうるならば、それだけ蘭印からの輸入を増加しうるわけである。

第二の方法は、かりに運賃補償法と呼ぶものである。蘭印からの輸入品のうちには、運賃關係を有利にすることによつて之を増進しうるものも少くないと言はれる。今は之を實證するの餘裕を有たないが、かりに斯くの如きものありとせば、運賃補償法を利用することによつて、その輸入を増加することが出来る。即ち蘭印からの輸入貨物の運賃を引下げると共に、蘭印への輸出貨物の運賃を引上げることによつて、輸入の運賃不足を補ふに、輸出の運賃過剰をもつてせんとする補償制度である。

今もし蘭印における内外商品の價格の上に、傳へらるゝが如き可なりの値開きがあるものならば、この値開きの一部を採り來つて、輸出運賃の引上げに充當することは不可能ではない。たゞこの方法においては、運送會社は一方に失ふ所を他方に補はれて問題はないが、輸出商人の利益の削減と輸入商人の利益の増加とを、如何にして調節しうるか、問題となる。その調節方法としては、輸出入商人のブローリングを作るも一の方法であり、また輸入利益の一部齎出による輸出補償の方法も可能である。何れにせよ、國家または第三者の介在による何等かの利害調節機關を必要とし、適當なる貿易統制工作を必要とすることと言ふまでもない。

第三の方法は、同じ趣旨による價格補償法である。例へば蘭印からの輸入石油が傳へらるゝ如く、噸當り約五圓の高値のために、良質に拘らず輸入を沮止しつゝありとせば、その値開きだけは輸入商を補償し、その代り綿布その他の輸出品の價格引上げによる餘剩利益をもつて、之を填補する方法である。この場合に輸出品の價格引上げが困難ならば、この補償方法を他に求めねばならぬが、傳へらるゝが如き値開きが相當にあり、且つ輸出統制を行つてダンピングを自制するならば、これは必ずしも不可能ではないと考へられる。たゞこの場合にも輸出商人の餘剩利益を徴收して、之を輸入損失の補償に充てるためには、そこに輸出入商のブローリングを作るか、または少くとも政府の介入による適當なる工作を必要とすることと言ふまでもない。

以上の諸方策は、日蘭間のバーター制を如何にして促進しうるか、換言せば蘭印からの輸入を如何にして増加しうるかの積極的バーター制の可能性につき考察したのであるが、一方では斯くの如き積極的方法を講ずると共に、他方では或る程度の輸出統制を加ふることによつて、消極的バーター制の方法をも考慮し、兩方面よりなるべく均衡貿易に近づかんことを策すべきであらう。

五、バーター制の代替策

かくの如くして輸入の増進と輸出の統制によつて、ほゞ均衡状態に達しうるならば問題はないが、かりに輸入の増進も豫想通りに期待されず、輸出の統制も行ひがたき状態にあつて、依然と

して不均衡の状態が繼續し、バーター制の實現が困難であるとせば、そこには最早蘭印の極端なる輸入割當制を緩和しうべき方策はないか、換言せばバーター制に代つて提案しうる考案はないか、それについて一二の方法を考へて見たい。

第一の方法は、日蘭の間に第三國市場を介在せしむる方法である。即ち蘭印に對する吾國の出超は、一應そのまゝにおき、第三國市場にして吾國の入超および蘭印の出超を續ける所、例へば英領印度またはシンガポールの如きをその間に介在せしめ、吾國は是等の地方からの入超を保證する代りに、是等の地方をして蘭印からの入超を保證せしめ、蘭印をして是等の地方への出超を引當てに、吾國からの入超を承認せしむるの方法である。之によれば第三國市場は、蘭印からの入超をつづける代りに、吾國への出超をつづけて、貿易均衡の目的を達しうべく、蘭印は吾國からの入超をつづける代りに、第三國市場への出超をつづけて均衡を得べく、吾國は第三國市場からの入超をつづける代りに、蘭印への出超を續けることが出來て、均衡に近づくことが出来るであらう。これは餘りに抽象的・理論的であつて、實際には種々の故障を伴ふことゝ思はれるが、兎もかく一つの方法として考へることは可能である。

第二の方法は、蘭印投資の方法を講ずるにある。蘭印へのわが出超だけは、之をその地に留めて蘭印の經濟的開發に貢獻せしむる方法である。尤もこの投資の方面如何によつては、却つて誤解を招いて反對を叫ばしむるかも知れぬが、投資の方法および方面の如何によつては、蘭印政府

の財政を援助し、または眞に蘭印のための經濟的開發に貢獻しうるであらうから、之をも排斥する理由はない。これまた確かに一つの方法であらう。

第三の方法は、蘭商救済の方法を講ずるにある。傳へらるゝ所では、蘭印における輸入制限または輸入割當制の直接の動機には、蘭商救済の意味も多分に包含されてゐるといふ。蓋し蘭印における吾が輸出品の大なる部分は、彼地に於ける邦商の直接賣込によるものであるから、蘭印への吾が商品の進出は、同時に彼地における邦商の進出を意味し、従つてまた彼地における蘭商の没落を意味するからである。それ故に何等かの方法によつて、この蘭商の窮狀を緩和しうるならば、わが商品の排斥もまた、或る程度に緩和され得るであらう。さればとて蘭商をして邦商の地位に代らしむるが如きは、多年の拮据經營によつて漸くその活路を開き得たる數千の邦商に打撃を與ふることゝなつて、採るべき策ではない。それ故に多數の邦商を生かすと共に、蘭商の窮狀をも救済しうるの方法はないか、こゝで考へられることは、蘭印輸入商の間に、蘭商と邦商とを包含する輸入組合または輸入プーリングの如きを組織して、之によつて利益の調和を計るか、邦商利益の一部を醸出して蘭商の補償法を講ずるか、或は輸入流通階段を一つだけ増加して、そこに蘭商を介在せしめ、一定歩合の利益を譲るか等々の方法が考へられる。何れの場合にも、それだけ中間商人の採る所が嵩むことゝなり、配給組織の不合理化を招致するものではあるが、今の場合は已むを得ない處置であらう。この中間費用の嵩むだけは、輸出價格の引下げとなつて、日本内地の商人または生産者の負擔となるか、またはそれだけ輸入價格を引上げて、蘭印内地の商人または消費者の負擔となるか、或はまた兩者の中間に落ちつくか、何れにせよ一時の便法とし

て配給組織の不合理化を忍ばんとするのであるから、その結果は結局するところ、日本の生産者が蘭印の消費者か、何れかの負擔に歸することは已むを得ないであらう。

六、日蘭會商の特異性

來るべき日蘭會商に對する何等かの參考資料を提供する意味において、まづ日蘭貿易に關する事實を分析し検討したる後、之に立脚して問題となるべき二三の提案を試みたのであるが、最後に日蘭會商が他の同種の問題、即ち日印・日英・日濠等々の諸問題に對して、如何なる特質を有するかを考へることは、この問題に對する國民の認識を深め態度を定める上に無益ではなからう。

第一に、最初に指摘したるが如く、日蘭貿易の前途は、金本位ブロックの前途に依存する點が甚だ強い。さきの日印會商においても、爲替條項は勿論一つの問題とはなつたけれども、それは全く異なる性質と重要さをもつて、茲では金本位ブロックの將來を問題にせねばならぬ。人はたゞ昨年の異常な進出だけに眩惑されて、これが日蘭貿易の常態なるかの如く幻想し易いけれども、それは主として圓の低落による進出に過ぎないのであるから、今もし金本位ブロックが崩壊して、蘭印爲替の低落するが如きことあらば、日蘭貿易は數年前の常態に復して、今日とは反對に吾國の入超となるかも知れぬ。而も金本位ブロックが今後いつまで持續されるであらうかは、何人も確言し得ざる所であらう。それ故にこの會商では、何よりも先づこの點を十分に考慮して對策を練るべきであり、長期にわたる固定的な取り決めを、今日の狀勢において協定することは、甚だしき危險を冒すものと言はねばならぬ。

第二に、蘭印における日貨排斥は、保護的色彩の極めて稀薄な點を注意せねばならぬ。もちろん綿布輸入の割當を和蘭本國にとり有利に決定したとすれば、これは和蘭綿業の保護には相違ないが、併しわが輸出品の大部分は、蘭印内地の産業を壓迫するものは少い。この點は日印問題・日英問題とは大に趣を異にする點である。また今日傳へられる所では、和蘭本國に有利な割當を充てるといふよりは、寧ろ全體としての輸入を制限せんとする氣運つよく、その輸入許可の基準を一九三一年頃におくことによつて、邦商を驅逐して蘭商を保護せんとする一石二鳥の方策を採るものゝ様である。その限り蘭商保護には相違ないが、併しそれは少數の商業資本の保護であつて、國民經濟の立場から國內産業を保護し、多數土民の經濟的向上を計らんとするものではない。即ち蘭印の場合は單なる商業政策の立場から、國際貸借を改善し、商業資本を保護せんとするものである。この點から言へば、問題は日印・日英問題に比して、却つて簡單であるとも言へる。即ち吾國は蘭印の意圖を酌み、その立場を理解して、或る程度に之を達成せしむることにより、問題の解決を計ることは必ずしも不可能ではない。少くともわが國內産業と同種の産業を國內に保育せんとする保護主義に比べては、そこには著しき相違のあることを認めねばならぬ。

第三に、日印・日濠問題に比較しては、わが國は印棉または羊毛に匹敵すべき何物をも蘭印に對しては有しない。即ち日蘭會商には吾國は利用しうべき武器を殆んど有しない。そこに會商の困難を豫想しうるわけではあるが、それだけ吾國はよく蘭印の立場を理解して、單に吾が利益の獲得にのみ狂奔することなく、與ふべきは與へ讓るべきは讓つて、彼れの更生を計ることによつて自らもまた更生しうるの道を考へねばならぬと思ふ。(九・四・二〇)